OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	＜紹介＞森山卓郎著「日本語動詞述語文の研究」
Author(s)	藤田, 保幸
Citation	語文. 1989, 52, p. 52-54
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/68798
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

紹介

森山卓郎著『日本語動詞述語文の研究』

藤田保幸

森山卓郎氏の学術博士学位論文「日本語動詞述語文の研究」が上梓された。森山氏は、これまで主に現代語のアスペクト研究の方面を中心に秀れた業績をあげてこられたが、このたび本書によって、動詞述語文を中心とする現代日本語文法の広汎な諸問題に対して自身の見解を明らかにされた。本書は、そうした広い問題意識のもと、先行諸研究を批判的に摂取しつつさまざまの創見を示した総合的研究として、八十年代の現代日本語文法研究の一つの成果というべき好著である。森山氏の御精進に深く敬意を表するとともに、本書が斯学に裨益するところの大きさを思い、いささかその内容の紹介を試みたい。

全体は、第Ⅰ部序論、第Ⅱ部形態論、第Ⅲ部統語論、第Ⅳ部文論、第Ⅴ部結語、という五部構成であるが、本書の真面目は、第Ⅲ部統語論（プロポジション構成にかかわる言語内容の諸レベルでの類型を論じる）及び第Ⅳ部文論（プロポジションにそれに対する話し手のとらえ方が加わって文表現として実現するレベルでの諸問題（ムード等）を論じる）にあると思われる。

第Ⅰ部では、語彙的意味と文法の相関を重視し、かつ「プロトタイプ」（「典型」）というとらえ方によって言語現象の（典型的なものから非典型的なものへの）連続性をも視野に入れた氏の記述的研究の基本的立場が述べられる。また、以下の簡潔な要旨を掲げて見通しを与えてくれるのも有難い。第Ⅱ部は、動詞の形態と意味―文法的なカテゴリーの関係を記述・整理するとともに、派生や複合の問題にも言及する。この Ⅰ・Ⅱ 部は、Ⅲ部以下の本論を準備するものともいえよう。

第Ⅲ部は、プロポジション構成にかかわる、格、ボイス、アスペクト、場所表現（～テイル・テイクなど）、主体性の諸レベルの類型についてそれぞれ全般的に要を得た記述がなされる。格の類型については、従来個々の動詞がどのような必須格成分をとるかというような観点から個々の記述と体系化が試みられてきたが、それぞれについて何が必須の格成分なのかの認定が当然問題となるところであった。森山氏は、まず基本的な格パタンと考えられるものを設定したうえで、動詞が典型的にはある格パタンをとる（場合によっては別の格パタンをもとる）という考え方に立ち、それぞれの典型的な格パタンをとった場合についての連語論的な意味の分析やその他について興味深い知見を示している。ボイスの類型をめぐっては、いわゆる「迷惑受け身」と「まともの受け身」の関係（連続する性格）、及び「自発」の位置づけが主に論じられる。殊に「自発」という文法的事実を現代日本語においてつっこんで考え直した点は注目される。この問題に関しての氏の研究は、更に森山・渋谷（一九八八）[注1]においても進められている。アスペクトの類型については、森山氏の年来の研究が凝縮されている。アスペクトとは、動作等動きのどの局面（はじまり、進行中、おわり等）をどのように（動き

として、あるいは状態として）とらえるかを示す文法カテゴリーであるが、従来ともすれば動詞の意味の問題として局限して論じられる傾向があった。森山氏は、アスペクト研究を動詞レベルに局限することなく、動詞句レベルや更に副詞的成分なども加わったレベル等においても総体的に記述するべきであることを強調し、そのために「時定項分析」という方法を提唱している。すなわち、アスペクト的な意味を、いくつかの素性（これを「時定項」という）の組み合わせとして記述しようとするもので、その立場から動詞レベルのアスペクトの類型が全般的に記述される。続いて、場所表現では、「大学へ歩いていく」「本を買ってくる」など「～テイク／テクル」形式によって表される方向・移動の表現が考察される。これらを、アスペクト的な「テイク」「テクル」などと形態的・統語論的に区別し掘り下げて論じている。おしまいの主体性とは、従来は意志・無意志の問題として論じられてきたことであるが、ここではこれを再考し、動詞の示す動作が意志的か無意志的かという二分法的とらえ方でなく、より意志的な動作を示す段階からより無意志的な動作を示す段階へと連続的な階梯が存在することを述べている。格、ボイス、アスペクトはもとより、これら「場所表現」「主体性」の類型をも体系の中に位置づけて論じた点で、本書はこの種の問題についての基本文献となるものであろう。

第Ⅳ部の文論は、大きく、「ムード」についての論と、性質を述べる表現か動きを述べる表現かという表現類型の問題とに分かれる。ムードについては、近年「擬似的ムード」として問題にされはじめた形式などの位置づけをも含め、ムード諸形式とその相互関係の分析がなされるとともに、「報告動詞分析」という手法を用いて文の通達的意味の分析が試みられている。次の第二節では、「ある」（「いる」）など存在述語の構文や、動詞文が性質をあらわすのはどのような場合かについて立ち入った記述・考察がなされている。

第Ⅴ部は結語であるが、ここでは森山氏の文生成観にあたる考え方が示される。第Ⅲ部の格の類型の論からの一貫した所論が、ここで今一度角度を変えて総括されるようで敬服させられる。

本書の特色は、何より射程の広い周到・綿密な分析にあるが、また、いささか角度を変えて見るなら、ある程度誰にも思いつけそうな手法を全体に目を配って丹念にかつ適切に行なっている点が、本書を大変説得力あるものとしているといえよう。例えば、格の分析に際して、「ヲ」「ニ」などその機能が一様でない助詞については、「ニツイテ」「ニヨッテ」等より機能が一義的で明確な複合助辞と置き換えを試みることによって、それぞれの場合の格の関係的意味を明確にするというような手法は、別段新奇な発想とも思われないが、本書におけるほど全体を見通しつつ適用されるとなると、大変な効力を発揮する。現象全体への見通しのもとに論ずる説得性は、本書のように現象全体を視野に置いて体系的にそれをとらえる書物の体系性の強さともいえるだろう。あるいは、「命ずる」「主張する」などの、発話行為のカテゴリー的意味を表す報告動詞を述語とする、「～ト……スル」のような形式を考え、どのような報告動詞の場合にその引用句「～ト」に入り得るかによって個々の文のムード的意味を分析しようとする「報告動詞分析」も、発想自体は特に新しいとも思われないが、本書におけるようなムード諸形式の適切な記述・整理を前提として、はじめて十分に展開できるものといえる（この分析は、今後の研究の一つの指針を示す先駆的研究となる

ものではないかと思われる)。ここでも、全体が緊密に結びついた本書の体系性の威力を思わせられるのである。

以上、理解不足による誤解をおそれるが、いささかでも本書の面目を伝えられたなら幸いである。なお仄聞するところによると、森山氏は本書に続きコミュニケーション文法に関する新著を執筆されるとのことである。氏の文運ますます盛んならんことを思い、一層の御活躍をお祈りする次第である。

〈注〉

(1) 森山卓郎・渋谷勝己(一九八八)「いわゆる自発について――山形市方言を中心に――」(『国語学』一五二集)

(一九八八年三月刊・明治書院・六八〇〇円)

―愛知教育大学助手―